

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第499号 平成25年2月22日

命をかけた願い

今月14日の夕刻に起きた、大阪府大東市の小学5年の男児が「一つのちいさな命とひきかえに、とうはいごうを中止してください」というメモを残して自殺した事件は、私にとっては余りにも大きな衝撃です。

大阪市教育委員会によると、市立小学校統合実施計画に基づき、男児が通っていた学校は今年4月近くの学校に統合され、2月17日に閉校式の予定だったそうです。

男児の父親は「親を含めて、もっともっと話をきいてあげないといけなかった。話し合いをする中で考えを深め合うような経験をしてもらいたかった。世の中を変えるには、死ねばいいと子どもたちに思っていて欲しくない。生きて世の中を変えると強く思っていて欲しい」と話しています（2月16日付朝日新聞）。

「世の中を変えるには、死ねばいいと思っていて欲しくない」というのは全くその通りで、死を持って解決出来る事など、この世の中に有ろう筈はありません。

特に、学校の統廃合は全国各地であまた行われていますが、それに反対して子どもが自殺したというような話は、寡聞にして聞いたことが有りません。

昨今の少子化の中で、学校の統廃合は避けて通る事の出来ない問題であり、男児の通っていた学校もまた、その対象となっていたようです。

学校の統廃合に関しては、財政の効率化の為にやるのだろうといった批判的な声が必要出て来ます。確かに、財政上の問題は大きいと思いますが、それ以上に、少子化によって学校がどんどん小規模化する中、如何に学校の教育力の維持・向上を図るかが重要な問題となっているのです。

一定規模の学校を維持しながらそこに十分な教師を確保して教育力の向上を目指す、また、多くの子ども達が互いに切磋琢磨して共に学び、共に成長して行く環境を整える、という事は決して非難される事ではない筈です。しかし一方では、学校が地域のコミュニティの核として重要な役割を担ってきたという観点から反対だという声も小さくありません。

つまり、この問題は、「少子化の中、学校の統廃合は止むを得ない」としながらも、「自分の学校が統合されるのは反対」という、いわゆる総論賛成、各論反対の議論に陥りがちで、それだけに解決が難しいといえます。

私も、道の教育長時代多くの学校の統廃合に係わって来ましたが、いずれの場合でも満場一致で賛成いただいた事はありません。しかし、全員の賛成がいただけない場合でも、やらざるを得ない場合があります。男児の通う学校が、どういう経緯で統合の決定に至ったのかは承知しませんが、地域の皆さんを交え様々な議論の末の事だと思います。

さて、今回の男児の自殺に関して申し上げれば、理解できない事が幾つかあります。

まず、男児は何故自殺を思い立ったのでしょうか。同じ大阪で起こった桜宮高等学校の男子生徒の自殺に触発されたのかも知れませんが、あのキャプテンの自殺は極めて大きな社会問題になりましたが、あの騒ぎを見て、自分が自殺すれば大きな騒ぎになると考えたのでしょうか。いずれにせよ、男児の自殺を防ぐことが出来なかった事は、非常に残念に思います。

男児は、作文で「学校を潰さないで」と訴える作文を書いたりしていたといえますから、学校側はこの子の気持ちを承知していたのではないのでしょうか。

自分が通う学校が無くなり、新しい学校に通う事に不安を感じていたのは、自殺した男児だけではなくた筈です。学校側が子ども達に対して、学校の統合についてどの様に話をして来たのか分かりませんが、結局は、教師の皆さんは、子ども達に新しい学校への夢を持たせる事が出来なかったという事になります。もしかしたら、そこには、教師自身が統合に反対という気持ちがあったのかも知れません。

また、親や地域の方々も子ども達に対して、「新しい学校への転校について、不安もあるだろうけれど、新しいお友達もできるし、楽しい事も沢山あるよ」という様なポジティブな話をして来たのだろうかという疑問も湧いてきます。

子ども達は感受性が強いですから、自分の周りで、反対署名が行われるなど反対の声が大きくなると、どうしてもその影響を受け易くなります。仮に統合に反対の立場だったとしても、子ども達には、統合にはこういうデメリットもあるがこういうメリットもある、というようなバランスのとれた話をすべきだと思っています。

そして何よりも重要な事は、子ども達に対しては、日ごろから命の大切さ、失ったら2度と戻らないという現実をしっかりと教えて行く事です。

「死んで花実が咲くものか」という言葉が有ります。

人というものは、生きている為に苦しい事や悲しい事に出会いますが、しかし生きているからこそ、楽しい事や嬉しい事にも沢山出会う事が出来るのです。子ども達には、その事を知って欲しいと思います。そして、それを伝えるのは、今を生きている大人達の大きな責任なのです。(塾頭：吉田 洋一)